



国家汉办/孔子学院总部
Hanban Confucius Institute Headquarters

北陆大学出版会
南京大学出版社

杜甫

《中国思想家评传》简明读本 日中文对照版

主编 周宪 程爱民

莫砺锋 武国权 著

村田和弘 译



YZL10890173067



《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

主编 周 宪 程爱民

莫砺锋 武国权 著

村田和弘 译

杜甫



YZLI0890173067

北陆大学出版社
南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

杜甫:日汉对照 / 莫砺锋,武国权著;(日)村田和弘译. —南京:南京大学出版社,2012. 11
(中国思想家评传丛书简明读本/周宪,程爱民主编)
ISBN 978-7-305-10778-8

I. ①杜… II. ①莫…②武…③村… III. ①杜甫(712~770)—评传—日、汉 IV. ①K825.6

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 269602 号

出版发行 南京大学出版社
社 址 南京市汉口路 22 号 邮 编 210093
网 址 <http://www.NjupCo.com>
出 版 人 左 健

丛 书 名 《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

书 名 杜 甫

著 者 莫砺锋 武国权

译 者 村田和弘

责任编辑 田 雁 编辑热线 025-83596027

照 排 南京紫藤制版印务中心

印 刷 南京人民印刷厂

开 本 850×1168 1/32 印张 9.75 字数 232 千

版 次 2012 年 11 月第 1 版 2012 年 11 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-305-10778-8

定 价 28.00 元

发行热线 025-83594756

电子邮箱 Press@NjupCo.com

Sales@NjupCo.com(市场部)

* 版权所有,侵权必究

* 凡购买南大版图书,如有印装质量问题,请与所购图书销售部门联系调换

《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

编辑委员会

主 任 许 琳 张异宾
顾 问 北元喜朗
副 主 任 马箭飞 周 宪 周 航
编辑委员 马箭飞 王明生 王 涵 左 健 田 雁
许 琳 吕浩雪 张异宾 村田和弘 周 宪
周 航 周 群 金鑫荣 泉洋成 胡 豪
夏维中 徐兴无 笠原祥士郎 蒋广学 程爱民
主 编 周 宪 程爱民

本 读 本

由南京大学出版社与北陆大学出版会共同出版。

日文版的版权属北陆大学出版会所有。

中日文版的版权属南京大学出版社所有。

序

古代中国は人類の文明にとっても精神にとっても、ゆりかごのようなものです。

ドイツ人哲学者カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883年～1969年)の見解によれば、エジプト、メソポタミア、インド、中国の四大文明の発祥の後、紀元前800年から紀元前200年の間、おもに紀元前500年を中心に、世界中に連続した体系的な文明がふたたび生まれたということです。この時代のことを彼は枢軸時代(Axial Age)と呼んでいます。これらの文明には大思想家たちが現れ、彼らは人類や世界の根源的諸問題について思索し、^{げだつ}解脱や超越の目標と方法について示唆したのです。たとえば、中国の孔子、老子、墨子、荘子などの思想家たちや、インドのウパニシャド(奥義書)や釈迦、ギリシャの詩人ホメロス、悲劇詩人のトゥキュディデイス、哲学者のヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、さらにパレスチナの思想家たちが、中国、インドおよび西方諸国の、それぞれ相互に交流のない地域において、ほとんど同時に出現したのです。そして、彼ら大思想家たちが創り上げた思想的様式および世界的な宗教は、現代もなお人類に精神のよりどころとされていて、彼らは今もなお我々の生活とともにあるのです。

さて、中国五千年の文明の歴史を座標として、ヤスパースの視点を重ね合わせると、紀元前551年から紀元前479年の間に生きた孔子は、まさに中国文明がこの枢軸時代にさしかかったころの代表的人物であり、彼はこの五千年の中間点あるいは折り返し地点にあったと言えます。



黄河文明の発祥から孔子の時代に至るまでと、孔子の時代から我々の現代に至るまでは、ともにそれぞれ2500年前後を数えることができます。孔子が現われる前には、中国に思想というものはあっても思想家は存在しませんでした。孔子以降、中国にも古代思想家たちが次々と現れて、彼らは中華民族だけでなく全人類にとっても価値のある豊かな思想的遺産を残したのです。孔子が唱えた「故きを温めて新しきを知る」^①とか「信じて古えを好む」^②といった思想上の原則は、中国の伝統を重んじるという姿勢に影響を及ぼしました。すなわち、古人の思想的遺産を尊重し、立ち止まることなく古人の思想を理解しそれを発展させ続け、その中から思考や宇宙・社会・人生問題に対応するためのすべを人々は獲得したのです。このことこそが、我々が今この『中国思想家評伝』簡明読本版(日本語版『中国著名歴史人物伝集』)を世に問う理由でもあります。

中国の悠久なる古代思想史を見渡すと、思想家たちが貢献した成果には深い造詣と高い価値があり、それは世界思想史上において独自の旗印を掲げるものとなりました。それら数々の思想は現代の中国あるいは世界にとっても、日々新しく生まれ、生命力にあふれたものと言えます。百家争鳴の先秦諸子、スケールの大きな含蓄のある漢や唐の経学^③、親しみやすく幽玄な魏晉の玄学^④や、知性を尽くした宋や明の理学^⑤など、

① 『論語』「為政」。(訳者注)
② 『論語』「術而」。(訳者注)
③ 儒教古典の解釈学。(訳者注)
④ 『老子』「莊子』「易」を尊崇する学風。(訳者注)
⑤ 人間の道徳性や天と人を貫くことわり(理)を追求する新儒学。(訳者注)

どれも思想学術のあでやかな花であり、仏教の色即是空の悟りや道教の神仙修養は宗教的信仰の沃土^{よくと}と言えましょう。そのほかにも、経世済民^①の政治・経済思想や自然の理をも乗り越えようとする巧みの科学技術や工芸の道、風雅の真髓に迫り、彩りの落ちることのない文学芸術……これらすべてにわたって豊かな思想を醸^{かも}し出しています。中国の思想はそれぞれが時には水と火の関係のように相容れることなく激しく論争し合ったかと思うと、さまざまな思想が合致し合い、道は異なれども同じところに行き着いたりしましたし、また、いろいろな学派が生まれ林立したかと思うと、それらが互いに啓発し合い、奥義を究めていったりしました。儒、仏、道の三教も論争のなかから融合し、さまざまな思想がともに行われて、対立しませんでした。このように、中国思想の成立は豊富で多彩なものであり、天人合一^②、知行合一^③、剛健中和^④などの精神的伝統を貫きつつ、継承や解釈をしていきながら変遷し、一代ごとに研ぎ澄まされ、総合と新奇の特色を表し続けてきたのです。

中国古代思想史には、思想家とか思索者とか、哲学者などといった言い方や概念はなく、聖人、賢人、哲人、智者、諸子、大師などの呼称があるだけです。とはいえ、こうした呼称こそがまさに中国古代思想家の特徴を概括していると言えます。彼らの社会的身分は、たいていが教師か学者でしたが、それは彼らの思想が道德と智慧^{ちえ}を追求したものだ

① 世を治め、民の苦しみを救うこと。(訳者注)

② 人の行為は天と連動していることを強調する考え方。(訳者注)

③ 知って行わないのは、未だ知らないことと同じであることを主張した実践重視の教え。(訳者注)

④ 強く健やかでありつつ、異なる性質を持った者同士が交わること。(訳者注)



からです。もちろん、より広い範囲から見れば、中国古代思想は、政治、軍事、経済、法律、工芸、科学技術、文学、芸術、宗教など多くの文明的領域において、大きな貢献をしましたが、創始者や集大成者など傑出した人物の言論や著作、あるいは弟子たちによってまとめられた言行録などこそが中国古代思想の重要な内容なのです。中国人は、孔子以前にすでに、「功を立て」、「徳を立て」、「言を立て」るの「三不朽」といった、超越を追求するための道しるべを作り上げましたが、これら人類社会のためにうち立てた大きな功績、個人的道德修行の完遂と思想、智慧、学説などのすべてはまさに不朽の歴史的遺産とも言えます。こうした意味から言えば、中国思想家たちの手による成果は、我々現代人が慣れ親しんだ職業思想家、哲学者あるいは宗教的先知をも大きく超えていると言えるでしょう。そして、我々が『中国思想家評伝』簡明読本を執筆するにあたって、こうした基準に基づいて思想家たちを選びました。

さて、南京大学名誉学長の故 ^{きょう あめい} 匡 亜明教授の監修を仰いで、南京大学出版社より出版された『中国思想家評伝叢書』は、中国 20 世紀以来、最も広大な中国思想家研究の成果と言えます。今回、簡明読本叢書の編集出版にあたって、まずこの 200 冊にもおよぶ『中国思想家評伝叢書』の労苦に深い敬意を表すものであります。この巨人の双肩に依りつつ、本簡明読本においても、学術的基礎を保持しながら、なおかつそこにいくらかの新鮮味を加えたつもりです。その新鮮味とは内容は深いままに表現は分かりやすくし、より広範な読者をも惹きつけるものにしたことであります。思索と読みやすい表現、生き生きとした物語と智慧……中国文化の「拡大」と文化のグローバル化を提唱する今日、この読本による古代中国思想家たちの紹介を通して、中国思想に関心を

持たれる読者のみなさんが、我々と古人たちとがともに直面する一つ一つの問題を掲げながら、古代の中国思想家たちと胸襟を開いた対話をされることを期してやみません。

編集委員会

2008年9月

目次(日文版)

序	1
第1章 意気盛んな青少年時代	1
第2章 悲しみ多し、みやこの仮住まい	19
第3章 世の転変を映し得て、詩句愈巧みに	38
第4章 隴蜀の間を流離す	78
第5章 成都草堂の一老人	99
第6章 梓州・閬州に流寓し、再び草堂へ戻る	116
第7章 白帝城にて人生を思う	130
第8章 湖北・湖南を漂泊す	156
第9章 詩人と詩歌の二重の模範	167
参考文献書目	180
訳出参考文献リスト	181
訳者あとがき	182

目录(中文版)

序	185
一、意气风发的青少年时代	189
二、旅食京华的悲辛	199
三、赋到沧桑句便工	210
四、流离陇蜀	237
五、成都草堂里的野老	250
六、流寓梓阆及重回草堂	260
七、白帝城头忆平生	269
八、漂泊湖湘	286
九、诗人与诗歌的双重楷模	292
延伸阅读书目	299

第1章 意気盛んな青少年時代

中国は詩の王国です。

西暦8世紀、長い伝統を有するこの詩の王国は、詩創作のピークをなす時代を迎えました。この時代には、多くの著名な詩人が誕生し、すぐれた業績を残しました。杜甫、そして杜甫より十一歳年長の李白(李杜と併称される)は、そのなかでも代表的な詩人であり、中国詩歌の歴史全体なかで最も光輝を放つ二つの巨星でもあります。

杜甫、字は子美、祖先は京兆(今の陝西省西安)杜陵の人です。杜陵一帯は昔、杜伯国の領地だったといわれ、秦代に杜県が置かれました。のちに漢の宣帝劉詢がここに埋葬され、その陵墓が杜陵と呼ばれました。杜陵のそばには宣帝の許皇后の墓がありますが、やや小さく、そのため少陵と呼ばれました。杜甫の祖先は杜陵附近に田畑を少し残していました。杜甫は成人後、長安で職探しをしたとき、ここに住んだことがあり、そのため杜甫は詩のなかで自分のことをよく「少陵の野老^①」と呼び、後世の人



杜甫像

① 野老とは田野の老人という意味で、官職に就いていない一介の野夫に過ぎないことを指す。(訳者注)



もそれにならって杜甫のことを「杜^{としゅうりょう}少陵」と呼びました。また杜甫の最後の官職が^{けんこうこう ぶいんがいろう}検校工部員外郎でしたので、一般には「杜^{とこうぶ}工部」とも呼ばれました。これらの呼称はどれも杜甫に対する尊称です。

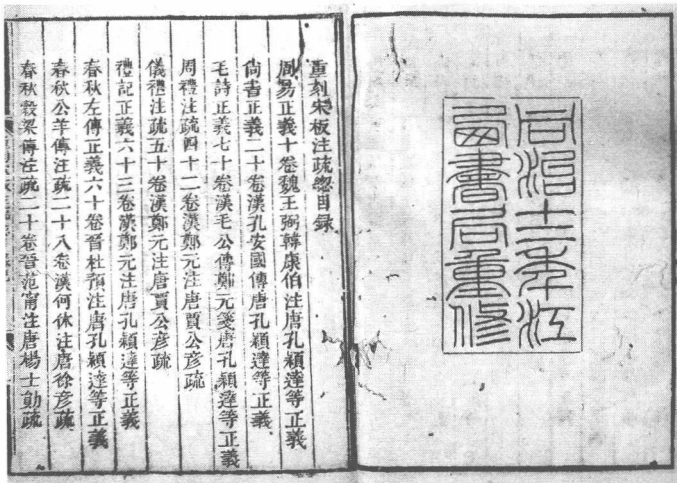
唐睿宗の太極元年(712年)^{えいそう たいきよく}①、杜甫は黄河の南岸、鞏^{きやう}州の城東二里^{きやう}②にある^{ようわん}瑤湾村(今の河南省鞏^か義^{なんしやう}市の南)に生まれました。杜甫の家は官僚一家でした。父親の杜閑^{と かん}はこのときすでに30歳を過ぎていましたが、かつて奉天^{ほうてん}県(今の陝西省乾^{けん}州)の^{けん}州令^{けん}③となったことがあり、母親も高貴な名門氏族の清河^{せいが せい}の崔氏の出身でした。

唐代のほかの詩人と同じように、杜甫も自分の祖先の功績や徳行を述べるのが好きでした。わたしたちもまず杜甫の一族から語り始めることにしましょう。杜氏の一族は良い文化伝統を持ち、代々にわたって学問をして官僚となる人物を輩出し、儒家の教えを厳守して、背いたことはありませんでした。杜甫は成人後ずっと、このように家庭において文化伝統があることを誇りに思い、詩文のなかでしばしば自分の二人の祖先を誇らしく自慢しています。その二人とは杜預^{とよ}と杜審言^{としんげん}です。

杜預は杜甫から少し遠く、十三代前の祖先です。西晋^{せいしん}の大臣で、三国時代の呉との戦争で赫々たる戦功を立てたことがありました。呉を滅ぼした後、江南で地方官の職に任じていた期間、杜預は水利事業を推進し、生産力を高め、大きな政治的功績も残しました。さらに杜預は博識

① 西暦712年を指す。以下同じ。(訳者注)
② 中国語で「城」は「まち」を意味する。また中国の一里は、ほぼ0.5 kmに相当する。(訳者注)
③ 州令は県知事を指す。(訳者注)

多才で、政治・経済・軍事・律令・暦法・算術・土木工事などの面でも書を読み漁り、そのため「杜武庫」と呼ばれました。とりわけ注目に値するのは、杜預の「春秋左氏伝集解」30巻です。これは現存する最も早い、最も権威のある「左伝」の注釈本であり、後に最も重要な儒家經典著作の総集「十三経注疏」に収められました。このような能文能武、



「十三経注疏」の書影

功業と著作のどちらでも後世に名を残した祖先は、杜甫から見れば、まさに儒家的理想の典型であり、そのために杜甫の尊敬を受けたのでした。30歳のとき、杜甫はもっぱら杜預を記念するための文章を書き①、その功業と名声をきわめて高く賞賛し、また自分自身が「敢えて本を忘れず、敢えて仁に違わず」、杜預を自分の人生の模範とすることを表明

① 杜甫「遠祖当陽君を祭る文」。本文の引用も同文から。(訳者注)



しました。杜甫は生涯にわたり感情が激しく、愛憎がはっきりしていました。杜甫自らは「悪を嫉みて剛腸を懐く」①、「窮年黎元を憂う」②などと称していますが、それと杜甫の家庭の良い文化伝統および杜預などの人物の事績の影響は不可分なものです。

杜甫には、このうえなく尊敬するもう一人の祖先がいました。それは祖父の杜審言です。杜審言は唐の高宗の進士③で、その生涯は政治的にはたいした業績がなく、人品もそう高くありませんでしたが、しかしその文才は当時の高い評判を得ており、若いころは李嶠、崔融、蘇味道とともに名声を等しくし、「文章の四友」と呼ばれました。後に沈佺期、宋之問と唱和し、今体詩形式の確立に大きく貢献しました。杜甫は祖父の詩歌の才能に対して可能な限りの尊敬を払いました。その詩学の成就を家学の伝統とみなして「吾が祖詩古に冠たり」「蜀僧闍丘師兄に贈る」と述べ、また自分の息子に「詩は是れ吾が家の事」「宗武の生日」と述べています。

杜甫の父親杜閑は、祖先たちのように華々しい官職には就きませんでしたが、しかしそれでもずっと官職の俸禄を得ていて、家の経済状況はまだ豊かでした。これは少年の杜甫の成長と学問、そしてその後の漫遊にとって、よい環境をもたらしました。杜閑と崔氏のあいだに生まれた長男は不幸にして早く亡くなり、崔氏も次男の杜甫を産んだあ

① 杜甫「壯遊」詩の一句。意味は「剛直な心で悪を憎む」。(訳者注)

② 杜甫「京自り奉先果へ赴き、懐を詠ず、五百字」詩の一句。意味は「一年中人民を心配する」。(訳者注)

③ 進士とは、隋の時代から始まる科学試験のうちの、詩賦により士を選抜する進士科の合格者を指し、非常に重んぜられた。(訳者注)

と、数年もたたないうちに亡くなりました。杜閑は盧氏^ろを後添えに娶り、のちに盧氏は杜甫の四人の弟、顥^{えい}、観^{かん}、豊^{ほう}、占^{せん}を産みました。さらに妹が一人おり、成人してから韋氏^{わい}のところへ嫁いでいきました。

杜甫は幼年時代の多くの時間を、東都^①洛陽の二番目のおばに預けられていました。おばは善良な人で、杜甫をたいへん慈しみ、病弱だった杜甫を、こころを尽くして世話しました。あるとき、杜甫といとこが一緒に流行性の伝染病^{かか}に罹り、おばはどうしたらよいか巫女に尋ねました。巫女は「子供を正面の柱の東南の角におけば何事もない」といいました。おばはそこで自分の子供を東南の角から移し、杜甫をそこへ置きました。杜甫の病気は果たしてそれから良くなりましたが、いとこの病気は日を追うごとに重くなり、ついには亡くなってしまいました。このことを杜甫は生涯忘れませんでした。のちにおばが亡くなったとき、杜甫は墓碑の碑文のなかでそのことばかりを取り上げています。杜甫は生まれつき敏感で、また同情心に富みますが、そのことと、杜甫が幼くして母親を亡くし、そして慈愛あふれるおばと出会ったこととは、大きな関係があります。

詩書の家柄に生まれた杜甫は、子供のときから作詩を始めました。「七歳 思い 即ち壮なり、開口 鳳凰を詠ず」（「壯遊」）という詩があります。鳳凰は伝説中の吉祥を表す神鳥で、儒家文化における光明と美麗の象徴です。この詩からは、杜甫の作詩における着想が子供のころから非凡であったことが伺えます。その後の生活を通して、杜甫は

① 洛陽は、みやこ長安の東側にあつて副都の役割を充てられていたため、東都と呼ばれた。（訳者注）



詩の創作を中断したことがないばかりか、ますます勤勉に、ますます良くなり、その高度な詩歌芸術の成就により、古代中国におけるもっとも偉大な詩人となりました。詩の芸術において、杜甫と杜審言の継承関係について見れば、たんに句法、章法などの面で祖父に学び、祖父を模倣した痕跡があるだけでなく、詩歌の意境の構想とイメージの造作の面でも杜審言の影響を受けました。杜甫は、杜審言の五言律詩重視という創作伝統を継承し、またそれを大いに発揚させ、^{れんしやうりつし}聯章律詩と五言^{はいりつ}排律という形式を用いて幾多の優れた詩篇を作り、大きな成果を成し遂げました。

子供のころの杜甫は恵まれた文学伝統と訓練を受けただけでなく、さらに多方面での芸術的な薰陶も受けました。

杜甫の時代、唐王朝はすでに百年に及ぼんとする発展を続けていました。国力は強盛となり、文化は発達し、交通は便利となり、中国内外の交流が頻繁に行われました。民族の知性・情緒が健康的で成熟していたことにより、唐代の人は開放的な心理で外来文化を受け入れ、蓄積していきました。これにより、西域民族の音楽や舞踊が大量に流入しました。例えば「^{けんき}剣器」と「^{こんだつ}渾脱」は西域から伝えられた二種類の健舞で、前者は戦争の場面を表現し、後者は荒々しく大胆な動作が人を惹きつけました。この二者がのちに結合して新しい舞踊が形成されました。それが剣器渾脱です。厳粛でテンポの緩慢な雅楽や、軽やかで柔らかくて穏やかな「^{さいせんきやく}采蓮曲」などの音楽に聞き慣れていた唐代の人は、こうした健舞にたいそう魅了されました。そのため民間で流行しただけでなく、宮廷の教坊でも専門に伝える者がいました。^{かいげん}開元の初め、教坊のなかで^{こうそんだいじやう}剣器渾脱舞に通じた者は、公孫大娘が一番に推されていま